



〇117〇

内部温度が千度を超える炉の前で、真剣なまなざしでつちを振り、鉄を鍛える姿は見る者に緊張感さえ抱かせる。高校卒業後の5年間、福岡市の鍛冶(かじ)工場は無給で修業を重ね、独立。7月6日に五島市岐宿町川原に宮崎鍛冶屋を開業した。声色にはあどけなさも感じられるが、仕事にかかれば力強い大人の男に一変する。

五島の鍛冶職人

宮崎 春生さん(24)

き、農具や包丁を作る鍛冶職人の仕事を知る。興味がわいて調べ始めた。高校の夏休みや冬休みを利用し、関東や県本土などの鍛冶職人を訪ねて仕事ぶりを見学、モノを作る魅力に引きつ

島民が使う道具を作る

けられた。その中で、伝統の博多包丁や大相撲の土俵づくりに使う土俵ぐわを作っていた福岡市の鍛冶工場で学びたいと決意。3年生の秋から弟子入り志願に出向いた。初めは工場の親方に「弟子は取らん」と突き放され、2度目も「給料を出せん」と拒まれた。でも、あきらめなかつた。先に福岡市内にアパートを借り、「もう借りましたから。給料は要りませんから」と3度目の志願に行くと、親方は「3カ月様子を見るか」と受け入れてくれた。

そこから5年に及ぶ修業が続いた。当初、つちを振るのは難しく不安が募った。しかし、粘り強く親方の作業を傍らで見て学び取り、3年半がたったころ、手応えを感じた。「面白くなってきた」。一通り包丁や農具が作れるように



包丁のひねりなどを直す作業に取り組む宮崎さん。五島市、宮崎鍛冶屋

5年間無給で修業し開業

なり独立を許された。今春、五島に戻り、準備した上で開業。滑り出しは順調だ。「包丁を作って」「修理して」と注文は相次ぐ。包丁は「極軟鋼(ごくなんこう)」という炭素含有量が少ない鉄を熱して割り、その間に鋼を入れてつちなどでたたき、徐々に形作る。ひねりを直した砥石(といし)を6、7個使い研ぎ上げる作業などもあり、集中力を要する。作業を終えて客に渡し「あの包丁、よく切れたよ」と言われると、胸の中で喜びが広がっていく。

開業から約2カ月。「まだ、良くできているのかは分からない」。そうだとしても一歩を踏み出せた。「地元にとされる人間になり、日本独特の文化である包丁を世界に発信したい」と飛躍を誓い、さわやかに笑った。

(五島支局・久保景吾)